

# 留萌の前浜に “群来” がきた



小杉忠利

昭和 33 年、私が高校 3 年の時、ついに修学旅行は中止になった。春ニシンの不漁が、ここ数年特にひどく、留萌の経済を不況に追いやり、青春の思い出造りにもなる筈だった、ささやかな旅行にさえも影を落し始めた。留萌の街全体が、ニシンにもたれかかって生きてきた証してもあった。

それから 41 年経った平成 11 年の 3 月、市内から数キロ南に行った礼受町の前浜に、実に 45 年ぶりに “群来” がやってきた。

奇しくも、その場所は、百年余りも繁栄し続けたニシン漁場の一つでもあった。

3 月 17 日の夜から、18 日の未明にかけて、人目につかないようこっそりと産卵していった。

早朝、登校途中に白い浜を見た小学生は、「牛乳が入浴剤を入れたようだ。」と言い、古くを知る年配の女性は、「昔は、毎朝見た浜の光景と同じ。間違いなくニシンだ。」と声を震わせた。

まだ雪の残る海岸は、それからが大変。付近の住民、通りすがりの人、漁協の人、市や道の水産関係の人、留萌市長、報道関係者らが浜に立ちつくし、白い浜をまぶしそうに眺めていた。

幅約 500m、沖合 100m に及んだと思われる広範囲な産卵場所を望むこの地域は、江戸時代、弘化元年の創業からニシン漁労の終焉する、昭和 32 年までの 113 年間に渡って使用され、現在は国の史跡として指定を受けている『佐賀番屋』そのものが繁栄してきた場所でもあった。



群来のあった礼受前浜付近航空写真 左端の四角はコンブ漁礁 右端は礼受漁港 背後は牧場

乱獲や自然環境の変化により激減したニシンが、45年ぶりに“群来”し、『佐賀番屋』の前浜を選んだのはなぜなのか。

たかだか水深1m程度のこの海に、ニシンを惹きつける何があったのだろうか。

稚内から留萌、そして厚田までの、オロロンライン海岸沿線は、猫の額のような狭い平地の背後に、高さ数十mの段丘が連なる地形が、延々と300kmも続く。この間で、日本海に直面して生活している市町村数は、約30で、その人口も10万に満たない。

大きな工場があったとしても水産加工場程度で、漁業、酪農、畑作、水稻等の1次産業が経済の基幹となっている地域である。

こんな似たような地形や環境状況の中で、どうして礼受が選ばれたのかは、ニシンになってみないと判らないが、ここに育った者として、私なりに考えてみたいと思う。

環境説からいくと、工場等による水質汚染は皆無で、生活排水等を含めた複合汚染はある程度あるかもしれないが、深刻なものではない。実はこの背後地の高台には平坦な傾斜地が広がり、市営の放牧場になっている。そこへ、緑の繁栄する小さな沢が入り込み、清流となって前浜へ流れ込んでいる。

特に3月から6月の時期は、春の雪解け水などが海に流れ込み、栄養塩が一年中で一番多い時期でもある。その栄養塩によるプランクトンが大発生する。

私の推測ですが、この**放牧による栄養塩が原因で、海藻類が他の地域よりも、豊かに**育っていたことが、ニシンを呼んだのではないかと考えています。

現にそこは、**水深0.5~1.5m程度の浅瀬**であるが、岩や砂地からなり、外海の荒波から守られていて、スガモを主として、フシスジモク、スギモク、カヤモノリが豊富に群落する場所でもある。

稚内水試の報告によると、『留萌から小平の海岸には、ここ数年ニシンの産卵が見られ、調査による**産卵場所の特徴**として、次のことがあげられている。



群来汁で牛乳を流したような礼受前浜

1. **スガモ、フシスジモク群来を中心に、多年藻の植生が広がる。**
2. **波が沖側で、砕波される。**
3. **天然溝があり、ニシンが岸に寄り易い地形である。**
4. **近くに河川水がある。**

そしてまたこんなことも報告されている。留萌市周辺の**海藻の分布は、殆どが水深3m以浅**であり、ニシンが産卵に利用し易いスガモ、モク類は水深1m前後の、波の穏やかな岸よりに多く、**1~2mの波当たりのよい場所にはコンブが成育している。**』

ニシンの産卵生態は、1回に3万から10万箇の卵を産み、それは粘着卵といわれるもので、海藻に付着する。海藻は貴重な産卵床の役割を果たす。産卵後1ヶ月で孵化し25ミリ、2ヶ月で40ミリ、3ヶ月で70ミリになり、この間動物性プランクトンを食べて大きくなる。その後、稚魚として沿海域でしばらく生活をするが、夏の始めには沖合に出て大回遊に移る。1年で15cm、2年で22cm、5年でおおよそ30cm、10~11年でおおよそ35cmに成長し、その間に秋には南下して越冬し、春に接岸して産卵し、その後北上して北方の冷水域で越夏するという生活を繰り返す。

今回の礼受浜での観測により、産卵から孵化までのニシンの生態の詳細な報告が出されている。以下に要点を記載する。

『3月25日の卵分布調査では、前述の海藻に**高密度に受精卵が付着**していました。1㎡当たり最大41万粒の付着卵が確認され、密度面積法による、この産卵場全体での推定の付着卵数は、21億6千3百万粒でした。2年魚がすべて産卵したとすると、雌7万2千尾が産卵したものと推定されました。産卵が雌雄1対で行われたとすれば、**14万4千尾**が押し寄せ、すべて漁獲されたとすれば**18トン**の水揚げとなったでしょう。

この日に市場に上がったニシンのサンプル96尾中の1尾に、耳石にアリザリンコンプレクソン(ACL)標識が確認されました。

この魚は、平成9年に孵化0日齢で**ACL標識**され、厚田・浜益・留萌・羽幌の4箇所から放流された**50万尾の内の1尾**で、2年で成熟して産卵に戻ってきたものと考えられます。

4月15日夜半には孵化が確認され始め、19日には孵化は終了しました。産卵から1ヶ月で孵化することが確認出来ました。孵化するまでの水温は、2~8の範囲でした。』

平成8年度に「日本海ニシン増大プロジェクト」事業が発足し、2年目の9年度に放流されたニシンの回帰が、たとえ1尾でも確認されたことは、私達にとっては心躍る朗報であり、事業に携わる人達に大きな勇気を与えたに違いない。

それにしても、江戸時代から明治、そして大正時代にかけては、50~100万トンのニシンが毎年捕れていたのに昭和に入ってからみるみる減り始め、昭和30年代にはゼロに近いほど激減した。水産王国の日本が、いや北海道が一挙に百万トン近い水産資源を失う。これはどう見ても異変であり異常事態である。

ではどうしてニシンが捕れなくなったのだろう。様々な原因が挙げられている。

## 寒流勢力の衰退

**ニシン産卵域の南限は秋田県の船川**で、明治29年には2千万尾位捕れていたのが急激に



刺網に掛かったニシンを喜ぶ漁民

衰退していった。青森県の日本海岸も同様であった。**江差のニシンが壮絶するのは大正12年である。**

昭和に入ると来遊の範囲は激変し、昭和13年には有史以来の凶漁に見舞われたが、昭和18年以降約10年間に渡り資源が回復した。それも**昭和32年を最後**として商業規模での来遊はない。

このように、南部漁場から来遊が減衰し範囲が次第に北上し、遂には壮絶した。このことから、対馬暖流や黒潮暖流の勢力が強まり、水温の上昇と海流環境の変化が原因の一つとみる説。

## 乱獲

魚群が絶滅的に減少する原因は色々あるが、第一に乱獲があげられる。漁獲力の高くなった現代漁業、特に**沖合底引漁業**方式は、資源自体の生産補充が間に合わず遂には枯渇をもたらす。

つい最近の出来事として、こんな話が記載されていた。

「昭和58年生れのサハリン・北海道系の春ニシンは資源の回復期を示すものであった。この時期捕らないようにする要請はなされたが、現実には昭和61年に、日本海・オホーツクで、特に沖合底引漁業者が、実に6万トンの春ニシンの親魚を捕りつくした。」

そしてこの対策として、次の二つのことを挙げている。

「第1は資源レベルが低くなった時は、禁漁にすべきである。アメリカのカリフォルニア州のマイワシ対策は、昭和42年より実に19年間に渡って実施され、<sup>マキアミ</sup>施網漁船団もそれを貫き通し、資源を回復させた。

日本でも、秋田県では、3年間の禁漁を行いハタハタ漁業を復活させた。

第2は、稚魚を大切にすることである。底引漁業は、稚魚を混獲し、無駄に捕り捨てている。北海道・青森・岩手は小型底引禁止の政府指示を守り45年経つが他県ではいつの間にか許可をしてしまっている。漁業政策の不統一が目につく」

## ・森林伐採や環境条件の変化

春ニシンの食物連鎖は沿岸性の珪藻に代表される植物プランクトンが光合成によって繁殖することに始まる。

そのためには、太陽の光と炭酸ガス。そして栄養塩類と水が大きな役割を担っている。

繁茂した珪藻は、ニシンの稚魚の餌となる撓脚類などの動物プランクトンによって捕食される。ニシンの産卵場は、汀線のごく浅い部分に沿って、狭く展開するから、珪藻類に必要な炭酸ガス及び栄養塩類は、陸水によって供給される。

この水源を確保していたのが、内陸部の森林であった。しかし、昭和初期から戦後に至る間に様々な理由で木材が伐採された。その結果、泥土の流出や食物連鎖の崩壊を招いたに違いない。

また、毎日使用している合成洗剤も魚類の増殖を阻害する。毒性の強い界面活性剤が含まれていて、薄めて1億分の1とかの低濃度にしても、その毒性が残っていることだ。四万十川のBODを計ってもそんなに高い数値ではなく、餌の藻類も豊富にあるのにアユが遡上しなくなった原因を追求した結果、合成洗剤との因果関係が明らかにされた。洗濯や朝シャンの利便性が環境汚染を招いている。

洗剤は、私達の身近にあるほんの一例でこの他にも、沢山の種類の環境汚染が、私達の生活や生命に影響を与えていることは間違いのないことだ。



網外しをする浜のオカミさん達

以上の3項目が、大きな原因の通説になっているが、いずれにせよこれらの衰退の原因を真摯に受け止め、前向きな対策を実行していけば、必ずニシンは戻ってくると考えたい。ニシンは、ニシン科のマイワシと同様に50年から100年のサイクルで変動を繰り返してきた。

私は、今、その海洋の環境が、ニシンに好転し始めた時期ではないかと感じている。

礼受前浜のように、磯焼現象とは縁のない、海藻類の繁殖する豊かな海に戻す努力と、稚魚の放流事業が続けば、必ず“群来”はやって来る。

実は、今年の3月18日に、礼受浜の漁場にも刺網は仕掛けられてはいたが、ニシンの方が賢く、漁獲されたのは僅かであった。

その体長は、殆どが35cm以上（年齢3～4年魚）であった。

稚内水試の報告によると、14万尾以上の“群来”が今年もあったことになる。

彼らは、産卵後無事に、また北の海域へ向かい『来春にはもっと多くの仲間を引き連れて、回帰してくるから。』と、快適な礼受前浜の産卵床にメッセージを残していったのだと思う。

四十数年前、私が小学生の頃、留萌港の南岸には数え切れないほどの汲み船が、ニシンを満載にして陸揚の順番を待っていた。

岸壁には、六段ほどに重ねた箱にニシンが満載されて積み置きされていた。一番上の箱のはみ出たシッポを、背伸びして捕まえ、縄をエラから口へ通す。見つかると怒られるので、また次の場所で繰り返し、10尾位になると、熊さんよろしくの姿で、家まで持って帰る。途中はまだ春の雪解で、ドロコ道。

ニシンは、生きはよいが、ドロコンコニシン。もって帰っても、何時も母親に、いらないと怒られていたが、こりずに、毎日繰り返していた。子供にとっては、これが遊びだったが、4月はまだ寒く、服をぬらし、歯を寒さでガチガチ震わせながらのニシン捕りだった。一方、母親達は、「身欠くニシン」に捌く内職に忙しく、「サバサキ」という小型の包丁を一つ持って、近所のニシン干場へ、毎日通っていた。

特に終戦前後の数年間、食糧難だったが、春ニシンのお陰で、ささやかではあったが豊かだった。

「江差の五月は江戸にもない」と言われたほど繁栄を誇ったニシン漁に伴い、様々な文化が北海道にもたらせられ消えていった。

「親方」<sub>ノ</sub>、「やん衆」<sub>ノ</sub>、「沖泊り」<sub>ノ</sub>、「モッコ」<sub>ノ</sub>、「サバサキ」<sub>ノ</sub>、「門付け芸人」<sub>ノ</sub>、「遊廓」等々も今では幻である。

そして、「ソーラン節」や「石狩挽歌」<sub>ノ</sub>、観



35cmクラスの捕れたてニシン

光資源としての「ニシン番屋」にその名残をとどめているだけになった。

しかし、日本海で捕れた大型で油がのり、その焼きたての、喉が鳴るほど美しい春ニシンを一度味わってしまった、少し昔を知る者の一人としては、何とかして、本物の春ニシンを再び呼び戻して欲しいと心から願うものである。

豊かな海を取り戻すことが、往時とは違うが色々な意味でこの地方に、希望と豊かさをもたらすことになる。

その目的に向かって、今年も100万尾の稚魚の放流、磯焼け防止の目的で海岸線に魚がすなどを埋める施肥作業、回帰率をよくする為体長20cmまで、中間育成したにニシンに標識を付けての生態調査等、色々な試みが始まっている。

留萌に対して、2000年の春は、“ニシンの群来”という夢を通して、地域の活性化へ向けて、大きな希望と試練を与えてくれているんだと思いたい。

次に報告出来る時は、このオロロンラインが“群来”で沸き返っている夢が、実現した時にということにして筆をおきます。

## 追記

その後、北海道指導漁業協同組合連合会参事の柳沼武彦さんが書かれた「森はすべて魚つき林」を読む機会があり、礼受浜の群来について、次の事が著されていたので追記としたい。

昔は、よく**ニシンぐもり**といわれていたが群来前夜の3月17日の天気を調べてみると日本海から低気圧が進み、それに伴う前線が北海道を通過し、日本海側は雨や雪が降り易い天気だったという。

荒天もしくはそれに近い低気圧が接近している時、**海の酸欠状態**を避ける為に、ニシンは波の静かな岸に寄って群来なのだという。

また、この時のニシンは、石狩湾系の地域性のもので、隣の厚田海岸で地付きニシンと言われているものと同じものであり、平成8年から北海道庁が**稚魚放流している効果が確認**されたことにもなった。

本格的なニシンの群来は、北海道サハリン系の来遊であるが、放流効果が現れたのも、この十数年全道の浜の母さんと共に続けてきた**漁師による植樹運動の波及効果**であると述べている。

ニシン再来のサイクルも百年。陸の植樹も百年単位。改めて、海と川と森は一つだということをかみしめ、「**魚付き林**」の**植樹運動**を一人一人が応援することで、豊かな日本海を創り出していきたいものだ。

「百年かけて百年前の自然の浜を」をキャッチフレーズにして、農林漁が一つになって植樹運動している事に心から敬意を表したい。